

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word)

【氏名】 増永 理考

【所属】(助成決定時) 京都大学大学院文学研究科

【研究題目】 ローマ帝政前期小アジア都市における文化資本の運用に関する研究

【研究の目的】(400字程度)

本研究は、ローマ帝国支配下のギリシア世界、特に小アジア(現在のトルコ)のギリシア都市で顕著にみられた、有力者の私費に基づく公的恵与に関して、従来看過されてきた、受益者たる都市共同体にとっての意義を解明することを目的とする。また、このような公的恵与には、しばしばギリシア諸都市の支配にあたったローマ皇帝や総督も関係していた。それゆえ、本研究は、ローマ帝国下のギリシア都市の実情に加えて、諸都市に関与したローマの支配如何という問題も射程に含める。このように、ギリシア都市にとってのローマの存在意義についても分析を加える本研究では、ギリシアとローマという異なる文化圏の接触という点で、高度に国際化、グローバル化が進展し、それゆえに、かつてないほど文化同士の接触、融合、あるいは摩擦が生じている現代世界を多角的に考察する一助をなすことが最終的に目指される。

【研究の内容・方法】(800字程度)

上記目的の遂行に際し、本研究では、専ら有力者によって提供される公的恵与、中でも都市文化に深く根ざすとともに、最も経済的にコストがかかった公共建築物、および祝祭を文化資本とみなし、これら文化資本を諸都市がどのように運用していたのかという観点を導入した。ここで言う文化資本とは、いわゆるP・ブルデューが唱えた、教養など個人的気質に関するものではなく、文化的価値だけでなく、経済的価値をも蓄積し供給する実体をともなった資本を意味する文化経済学上の考えである。この概念や言葉そのものは古代に存在しなかったが、都市に提供された公共建築物や祝祭は、古代におけるその文化的、経済的価値を踏まえると、上記の意味での文化資本として理解することができる。都市による文化資本の運用という観点を採用することで、先行研究が前提としてきた有力者による「与える」という一回的な行為を超えた、都市にとっての持続的な恵与の意義に迫ることが可能となるのである。

こうした視点のもと、具体的には、小アジア南西部のリュキア地方における都市に着目した。同地方では、小アジアの中でも「コイノン」と呼ばれる都市の連合組織の発展が著しかったとともに、単一の都市の枠組みを超えて地域的に大規模な恵与を行なったオプラモアスなる有力者の存在が確認される。このオプラモアスによる恵与に関しては長大な碑文が残っており、本研究では、この碑文を主な素材として利用することとした。というのも、ここに含まれる諸都市の決議文からは、彼の恵与に対して都市がどのように関与したのか、そして、ローマ皇帝や総督らの書簡からは、ローマ中央政府と有力者としてのオプラモアス、あるいはローマ中央と同地方の都市やコイノンとの関係を窺い知ることができるからである。加えて、本研究に際して、オプラモアス関連の碑文が設置されているリュキアの都市ロディアポリスを訪れ、碑文の形態や設置場所などに関して簡易的な実地調査も行った。

【結論・考察】(400字程度)

上記碑文を分析したところ、リュキアの一重要都市であるミュラに関して、同市は、主体的にオプラモアスを顕彰する一方で、彼の申し出に対してさらなる金銭的要求を行うことで、公共建築物に代表される文化資本を経済的に確保していたことが明らかとなった。この動きの背景には、ミュラ同様、リュキアの重要都市の一つであるパタラとの競合関係が想定される。すなわち、ミュラは、オプラモアスの恵与を通じて、都市の文化資本の獲得や維持、ひいてはそれに伴う都市の地位向上を企図していたのである。ミュラをはじめ、リュキアの諸都市は、ローマ総督の反対にあつてまでオプラモアスを顕彰し、その承認をローマ当局に求めた。本研究の分析結果を踏まえると、都市は彼への顕彰の承認を通じて得られたローマの権威すらも自らの競争的環境の中で活用しようとしていたと理解できる。このような状況は、「グローバル化」した世界において地方が選択した戦略の一面として、現代世界との比較にとっても有用であろう。